〔新刊紹介〕

足立尚計著

『知られざる福井の先人たち』

山上笙介

福井大学名誉教授の青木紀元氏が序文を寄せている。

足立尚計氏が平成二年から四年春にかけて、書き綴った「知られざる福井の先人たち」が、一冊の書として刊行されることになった。

（中略）本書は、一口に言えば、異色のある福井県人物誌と評することができる。その中に取り上げられた人物は、一般の人々がよく知っている著名人はごくわずかで、大多数は今まであまり世に知られなかった市井の人たちである。この点に、「知られざる福井の先人たち」の特色がある。足立氏は福井市立郷土歴史博物館学芸員として、数多くの郷土に関する歴史資料に触れて来た強みを生かして、これまで陰に隠れて現われることのなかった人物を次々と掘り起こし、我々の前に見せてくれた。これらの人物は孜々として勤め、営々として励み、黙々と地道に社会の底辺を支える役目を果して去って行った人々である。このような型の人物に、福井県民性の代表を見ることができるように私には思われる。（後略）

この「序」にあるように、本書には、福井県にかつて生き、あるいはゆかりを持ちながら、いまでは忘れられ、埋もれた存在の人びと百人の略伝が収録されている。

福井県は、古来の越前と若狭の二カ国を県域とする。越前は、その昔、高志・越とも呼ばれた。近畿の都が近く、日本海に面しているので、古くから三国・敦賀（ともに越前）、小浜（若狭）などの良湊が知られ、西廻航路を通じて、青森県域とも交流があった。

奈良時代と平安時代には、それぞれに国府が置かれ（現在の武生市と小浜市）、越前の国府では、派遣役人藤原為時の娘である紫式部も、少女期を過ごしたそうである。

戦国時代は、朝倉・武田両大名の抗争や、加越の一向一揆が有名だし、北ノ庄（現在の福井市）に滅びた柴田勝家と夫人お市の方の悲劇も、よく知られるところである。

江戸時代になると、越前に福井（松平氏）・丸岡（有馬氏）・鯖江（間部氏）・大野（土井氏）・勝山（小笠原氏）の五藩、若狭に小浜藩（酒井氏）が長くつづいた。

なかでも、福井藩（三十二万石）は、徳川家康の二男結城秀康を祖とし、二代藩主の松平忠直は、表むき乱行の理由で永蟄居を命ぜられた話題の人物である。また、十六代藩主松平慶永（春嶽）は、幕末の進歩的な指導者として名をとどめた。

諸藩にも人材が多く、たとえば、幕末に橋本左内・横井小楠・由利公正（福井藩）、梅田雲浜（小浜藩）などのすぐれた人びとを輩出しているのである。

しかし、本書では、こうした有名人を意識的に除外し、いまは忘れ去られ、うずもれた人たちを登場させている。

本書で脚光を浴びる人物は、さきにも述べたように、百人にのぼるが、古くは、奈良時代の詩人であり、越前守・越前按察使、さらに遣唐大使にも任命された多治比真人広成をはじめ、平安時代で紫式部の父である藤原為時（詩人・文官）。新しいところでは、平成二年十一月に物故した詩人であり、社会教育家の則武三男にまで及んでいる。

ただ、年代別では、古代・中世があわせて五人とすくなく、近世が四十九人、近現代が四十六人と圧倒的に多いのは、遺る資料の関係から、いたしかたないことであろう。

人物たちも、じつに多彩である。貴賤貧富を問わず、学問・行政・芸能・技工、それに隠れた善行者や勇敢な女性、名物芸者までも採り上げている。数例を紹介すると、

西尾　宗次＝福井藩士、通称を図書。元和元年（一六一五）の大坂夏の陣に従軍し、大坂方の謀将幸田幸村を討ち取った。幸村愛用の采配を「真田幸村血付き采配」として子孫に遺し、供養のため越前松平家菩提寺に〈真田地蔵〉を建立した。

平柳杢右衛門＝鯖江藩勘定奉行。正直でかたくなな人柄だったが、享保十九年（一七三四）三月、私曲の科をかぶせられて刎刑に。しかし、百年後、七代藩主間部詮勝の再調査命令によって無実が判明。家名復興、「鬼神塚」が建立された。

足羽　敬明＝寛文十二年（一六七二）生、宝暦九年（一七五九）卒。福井市足羽山上にある足羽神社の神主だったが、国学を深く探究し、これにより従四位上に叙せられて、福井国学の始祖と呼ばれた。和歌・漢詩に秀で、蔵書家でもあった。

松岡屋吉兵衛＝福井城下立矢の商人。文政十一年（一八二八）、毎戸に寄付金を募り、足羽山に登る愛宕坂・百坂を修復した。この功績を讃えた石工らが吉兵衛の石像を建立したが、妬む者があって、石像の首がたびたび打ち落された。

山本輪田丸＝狂歌師、御影堂前（敦賀市）の商人。山本勘助の子孫と称して、多くの狂歌を詠み、『江越狂歌百人一首』を刊行。天保五年（一八三四）に他界。

松田　和孝＝幕末の福井藩下士。通称を東吉郎。橋本左内・久坂玄瑞らと親交し、藩主春嶽にしばしば提言して影響を与えた。大老井伊直弼と対立する春嶽が隠居を命ぜられた責任を感じて、安政六年（一八五九）六月に自決。二十三歳。

平瀬作五郎＝安政三年（一八五六）生、大正十四年（一九二五）卒。教壇に立つかたわら、植物学の研究に没頭し、明治二十九年（一八九六）九月、銀杏の精子を世界で初めて発見した。また、梅肉・梅酢の殺菌効果に着目して力説した。

堤　太四郎＝殉職警察官。昭和十九年（一九四四）に福井県巡査。翌年から三国警察署に勤務した。ところが、二十一年五月五日、同僚と二人で夜間警邏中に、連続窃盗事件の容疑者を発見。連行しようとして刃物で抵抗され、十八ヵ所の刺傷を負って殉職した。二十八歳。利発で口数すくなく、実直一途の好青年だった。

女性も十五人が紹介されている。藩主夫人が三人に、幕末の志士雲浜夫人の梅田信子も登場する。歌人・絵師（画家）・教育者が多いが、異色の女人たちもいる。

子守娘　綱＝小浜藩遠敷郡小松原村（小浜市）の人。明和六年（一七六九）、子守奉公中に、狂犬に遭って襲われ、幼児をかばって自分は死んだ。十五歳。

勇婦　さん＝福井藩篠尾村（福井市）百姓善太夫の娘。文化十一年（一八一四）、母を救おうと狼に立ちむかい、組み伏せて斧で叩き殺した。二十四歳。

肴屋　ほか＝文政年間（一八一八～一八三〇）、福井城下の肴屋の妻。近所に住む貧困の子らをへだてなく養育し、死後、徳を讃える「宝加塚」が建立された。

山田　勢津＝幕末、福井屈指の料亭「五嶽楼」の名物女将。藩主松平春嶽に目をかけられ、看板を揮毫してもらった。

酒井おゆう＝幕末～明治初期の福井芸者、踊りの名手。北陸地方を訪れた伊藤博文に愛され、東京へ伴われて囲われた。

堀江　小竹＝大正期の福井芸者。体重一三八キロの巨体。好んで力士姿をしたために、〈角力芸者〉と呼ばれた。

柘植　とら＝明治～昭和期の福井の平凡な主婦。しかし、生涯、子供たちを愛して慕われ、昭和五十四年に九十歳で死去。

著者の「あとがき」によると、「知られざる福井の先人たち」は、日刊紙「サンケイ」の記者に依頼されて執筆し、平成二年一月二十日から同三年九月二十五日まで毎週一回、同紙地方版に連載した。この分は七十九回、八十四人を紹介したが、単行本として上梓するとき、これに補筆し、さらに十六人を追加して、ちょうど百人にした。

だいたい一人分あたり千二百字前後。これよりも長いもの、短いものもあるが、これらは主として追加分であり、総体的にみれば、一項目が一気に読める、手ごろな読みものになっている。人物ごとに、本人の写真、あるいは関連する写真・図版が添えられてあり、調査と資料収集の苦心がしのばれる。

追加分十六人のうち十一人は、著者が市政広報「ふくい」に連載中の「福井ゆかりの百人一首〝松虫音〟」から転用している。『松虫音』は、〈越路百人一首〉とも呼ばれ、江戸時代中期の安永五年（一七七六）に、足羽川のほとりに住む藤原信夫（しのぶ）なる女性名の人物が、福井に縁故あるひとたちの和歌を集めた歌集である。編者をはじめ、詠みびとにも不明なことが多いが、著者は、これが解明にも取り組んでいるのである。

それというのも、足立氏は、福井市立郷土歴史博物館の学芸員として、『福井市史・通史篇』・『福井県神社誌』などの編集・執筆委員を勤めると同時に、第一会月光歌筵新人賞を受賞し、歌誌「月光」の同人となって、歌集『定本東翠の歌』（一粒社）を持つ歌人でもあるからである。先人の足跡をさぐり、謎の解明に意をそそぐのも、当然のことであろう。

本書には、人物誌百篇のほかに、巻末に次の資料が付録してある。

一、越前松平家系図
二、松平春嶽関係系図
三、福井歌壇略系統図
四、菱川師福略系図

〈三〉は、福井県歌壇史を総見し、〈四〉は、同じく絵画史の資料と

して参考になる。

（株式会社フェニックス出版、福井県福井市渕町十五―八、平成四年五月刊、B6判二四〇頁、一九〇〇円）

（やまがみ・しょうすけ　新編『弘前市史』執筆編集委員）